



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	中国語数量詞の<恣意性>について
Author(s)	橋本, 永貢子
Citation	[岐阜大学地域科学部研究報告] no.[9] p.[1]-[12]
Issue Date	2001-09-25
Rights	
Version	岐阜大学地域科学部 (Faculty of Regional Studies, Gifu University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/4492">http://hdl.handle.net/20.500.12099/4492</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

# 中国語数量詞の〈恣意性〉について

橋本 永貢子

## On the “Arbitrariness” of Numeral Classifiers in Mandarin Chinese

Ekuko HASHIMOTO

### 0. はじめに

中国語の学習者にとって厄介な文法項目の一つに、数量詞が挙げられるであろう。ここでいう数量詞とは、数詞と量詞、つまり“一本书”“三枝笔”における“一个”“三枝”のような二つの形態素から成っているものをいう。中国語の量詞に相当するものとして、日本語にも「(本一)冊」や「(鉛筆三)本」といった助数詞があるが、中国語の量詞は日本語の助数詞に比べて、語彙数が多いのみならず、使用頻度も高い。その大きな理由は、中国語の量詞が、計数機能・類別機能のほかに、いわゆる個体化機能をもつことにある。個体化機能というのは、大河内(1985)の言を借りれば、『類名や総称である(中国語の)名詞は単体ではなく、ある種の抽象の中にある。これを具体的世界のものにかえる』働きのことである。つまり、『中国語の名詞は非可算的であり、量詞を付することで可算的になる』ため、逆にいえば、現実世界に、ある事物——人や動物を含める——が存在していることを表現するときは、その名詞に数量詞を付けなければならないのである。

しかし実際には、大河内(1985)が指摘するように、現実世界に存在する事物すべてに数量詞が付加されるわけではない。数量詞を付加するか否かについて、何人かのネイティブ・スピーカーに対して調査を行ったところ、全員が一致する場合もあれば、一致しない場合もあるという結果が出た。このことは、一口に個体化とはいうものの、ある事物を個体と認めるかどうかは個々人によって差があるということにほかならない。そして個人差が生じる原因としては、聞き手・読み手がスキミングしようとする、広い意味での状況的コンテキスト、あるいはその視点のおき方が異なることにあると予想される。少なくとも、個人差があるということ自身から、数量詞の生起が話し手・書き手の何らかの主観に左右される面を持つことは指摘できるであろう。

そこで本稿では、数量詞が付く場合と付かない場合とで、名詞句の指すものがどう異なってくるのかを確認しながら、「個体化」の意味するところを明確にしていくこととする。そして数量詞の生起が、話し手・書き手個人の主体的な判断あるいは認知と深く関わっており、その意味において〈恣意性〉があるということを示していきたい。

## 1. 定であるということ

### 1.1 コンテキストにおける定

現実世界に存在するものであっても、すでに言及されているもの、つまり定のは、一般に数量詞をつけず、いわゆる裸の名詞で示される<sup>1)</sup>。しかし、それに対して未だ言及されていないものには、必ず数量詞が付くかというところではない。

- 1) 王尔敏凭着国内学的那一点日语参加了摸底考试, 试卷改出来, 一位女老师告诉王尔敏: “你得了四十五分。(留)
- 2) 她向我介绍说, 他们是从北京来的一对夫妇, 从事文化工作, 专程陪 12 岁的儿子来漠河看日全食的。(观)

1) では、直前の“参加了摸底考试”から、“试卷”がコンテキスト上では、定になっているため数量詞が生起しない。ここで“试卷”に数量詞を付加しても、不定と読まれることはなく、数量的な読みが強調されるばかりである。つまり“一张”を付加すれば、何枚かあるうちの一枚と解釈されるし、“两张”を付加すれば、“试卷”が全部で二枚あって、その二枚の解答用紙という照応指示をしていると解釈される。2) の“12 岁的儿子”は、北京から来た夫婦の子供を指し、その子が一人っ子であるなら数量詞は付加しない。一つ、一人しかいないものに“一个”は付かないからであり、このコンテキストにおいては不定となりえないからである。例えば、“她抱着一个孩子出来了。”は、彼女が保母さんであったり、双子の母親であったりすれば使われるだろうが、一人っ子である自分の子供を抱いているならば、“她抱着孩子出来了。”となる。

また、定であるかどうかというのは、直前のコンテキストのみで決定するわけではない。

- 3) 一个棕色皮肤、黄色长发的中年妇女推着一个庞大的行李箱, 上面坐着一个两岁左右的小男孩, 小男孩手中摆弄着玩具, 忽然发现了摄像机, 好奇地睁大眼睛盯着摄像机的镜头, 没有一点成年人在镜头面前的危惧和羞涩。(留)
- 4) 马天民还在理发店门口。  
摸摸头发, 是嫌长了一些。他迟疑片刻, 羞涩地一笑, 撩开门帘进去。(今)

3) は、日本の中国人留学生を描いたドキュメンタリーをプロデュースした女性と、そのドキュメンタリーの内容を書いたルポルタージュの後半部分、つまりドキュメンタリーから起こされた部分の冒頭である。読者は前半部分でそのドキュメンタリーが出来上がるまでの経緯を読み、視点は完全に撮影者に寄っている。したがって、“摄像机”にかかわる情報が全く出てきていないにもかかわらず、それが上述のドキュメンタリーを撮っている“摄像机”だと読むことができる。かりに、このドキュメンタリーに対して何ら共感を持っていない人がこの部分を書いたとすれば、数量詞を付けることもあるだろう。しかし、この

ドキュメンタリーがあまりに有名であるため、書き手と読み手が共有する、文脈外の、すなわち広い意味でのコンテキストにおいて、“摄像机”は十分に特定可能であると書き手は判断したのである。よって数量詞をつけることは、却ってそのコンテキスト上にある“摄像机”以外のビデオカメラを指すことにもなる<sup>2</sup>。4)では“马天民”が理髪店の入り口に立っているというコンテキストから、“门帘”が特定され数量詞がつかない。それに加えて、“门帘”が通常は複数あるものではないという常識からいっても、数量詞が付加されない。

このように、話し手・書き手がある事物を定とみなすのには、それ自身がすでに言及されていることだけが条件ではない。それを特定できるような「てがかり」が既にあると、或いは文脈によらない事前知識やいわゆる百科事典の知識から、聞き手・読み手がそれを特定できるであろうと、話し手・書き手が判断した場合にも、それは定として裸の名詞で提示されるのである<sup>3</sup>。ひるがえって、聞き手・読み手の側は、話し手・書き手によって裸で提示された名詞は、先行する文脈、或いは現有の知識の中で指示するものを見つければよいということになる。

## 1.2 総称という定

さて、数量詞は具体的な個体を指すときに生起するものであるから、話し手が総称としてある事物を示す場合に数量詞が付かないのはいうまでもない。

### 5) 我喜欢吃苹果。

このとき“苹果”は、話し手が意識するしないに関わらず、他の食べ物、例えばトマトや梨などとの対比で示されている。総称というのはそういう意味において、類レベルで構成される上位カテゴリーの中の一成員を指すという一面を持つ。したがって、私たちがあある事物を幾つか列挙しようとした場合、それが、現実世界に具体的に存在するものであるにもかかわらず、そうした類レベルの視点でとらえていたとしても不思議はない。

### 6) 在东京的另一端，形单影只的冯明在湖边沉思默想。

湖边有孩子在玩，有成群的鸟在飞。（留）

### 7) 张丽玲见到他时，他穿着白衬衣，扎黑领带，手里拿着清洗工具，胸前佩带工作卡。（留）

### 8) 王尔敏越走越近，宗元向她挥手，清楚地看见她头发上别着的白色发卡，身上穿着牛仔上衣，手中推着行李车，眼中挂着泪花。（留）

6) 7) 8) の名詞に数量詞を付けても文法的にあやまりではないし、伝えようとするイメージにも大きな違いはない。ただ、数量詞を付けない、つまりそれぞれの名詞が表すものの個性性にことさら注意を向けないことによって、6) では“孩子”と“鳥”の対比性が、7)

では彼の身に付けているものというレベルでの対比性が明らかになっているといえよう。現実世界に具体的にあるものであっても、話し手・書き手の伝えようとするものが類レベルの情報で、その個性性を問題にしないならば、むしろ数量詞をつける必要はない。また8)のような主述句の列挙においても、ことさら個性性を強調するよりは、類レベルで伝えたいほうが効果的である。なぜなら、そもそも列挙しようとするのは、部分ではなく全体を視野に入れてのことであり、それに反して個性性にこだわれば、焦点が分散して全体がぼやけてしまうからだ。つまり、前者が優勢ならば裸で、その逆ならば、数量詞を付加した形で提示されると考えられる。もちろんあくまでも個性性にこだわれば、9)のように列挙されても数量詞は生起するし、10)のように列挙する中でもそれぞれへの思い入れによって数量詞が生起したりしなかったりする。10)では、昨年までのプレゼントと、今年のプレゼントという精神的な距離感が個性性に向ける意識の相違を生んだと考えられる。

- 9) 我知道了他叫周方庐，在P城一家广告公司工作。他穿一件土黄色圆领羊绒衫，下身是条<sup>4</sup>灰色水洗布裤子。（观）
- 10) 鱼纹每年磕头都会得到礼物，前些年是蝈蝈笼、鼠夹子、兔皮手套、松塔垒成小屋子等等，今年是一条拴狗用的皮项圈。（朋）

また、翻訳における訳文の相違は、類レベルでとらえるのか、個体のレベルでとらえるのかという翻訳者のテキスト解釈の相違が反映したものといえよう。

- 11) a) 教室の入り口を入ってすぐのところに設けた席に、悪いことをした子を座らせ、反省を促す。（五）
- b) 他在教室一进来的門邊設了位子，叫做錯事的學生坐在那里反省。
- c) 他在教师一进门的地方专设一个座椅，哪位同学做了错事，就让他坐上去，令其反省。

b)の訳者は、「席を設ける」ことについて、その目的を達成する——反省を促す——ための手段として、類レベルで描き、c)の訳者は、「席を設ける」こと自体を一つの出来事ととらえ具体的な「席」として描いている。どちらがよい訳文かはさておき、どちらの解釈も可能であり、それはまた作品を理解する場合のみならず私たちをとりまく外部世界のとらえ方がまさに解釈自在であることを示している。ある事物を類として描くか個体として描くか、つまり数量詞を付けるか否かは、あくまでも、その状況・場面において、事物あるいはそれに関わる事象を、どう解釈するかという個々人の主観によって決定されているのだ。

そして、ある「事物」を類レベルでとらえるということは、私たちが持っている百科事典的知識というコンテキスト上のそれに照応することであり、照応指示である以上、不定のものではないのである。そういう意味において、総称は定であり<sup>5</sup>、定であるからこそ、

やはり数量詞は生起しないのである。

## 2. 状態表現と個性性

同じ景色を見ていても個々人によって印象に残るものが違うように、実際の景色と個々人が認識した景色は一様ではない。あるものには注目し（囟）、あるものは背景とする（地）、という主体的な解釈がなされていて、その解釈は、10人いれば10通りの解釈がある場合もあれば、ほぼ一致する場合もあろう。また2通りの或いは3通りの解釈になる場合もあろう。そして、こうした解釈の恣意性がまさに、前節で述べた個体と類というとらえかたに投影されている。このことは、「もの」ばかりではなく、事象一般に当てはまることであり、ある出来事についても、どこに視点を置きどのようにパースペクティブをとるかによって表現の仕方が変わってくる。ただ、ホモサピエンスとしての一般的な傾向があることは認められており、例えば、原因にかかわる事象は「地」で結果にかかわる事象は「囟」、時間的に先行する事象は「地」で後続する事象は「囟」、移動する存在を表現する部分は「囟」でその背景になる部分は「地」として理解されるという。そうであるなら、ある動作がなされる際の様態や状況を表わす表現は、動に対する静となり、「地」として理解されやすいということがいえよう。そしてこのように考えれば、様態や状況を表わす表現の目的語が数量詞を伴わない<sup>7</sup>という現象について説明を加えることができる。すなわち、背景化される様態や状況を表す表現において、その目的語はことさら個性性を明示される必要はないからである。

- 12) 在东京天刚擦黑, 李博背着双肩包赶到车站买票。 (留)
- 13) 他接着讲鱼纹, 说鱼纹与他连心, 他有一次在山中倒套子时一匹马被圆木轧伤了腿, 他正愁无法下山找人求救, 鱼纹在家中正在炕上弹玻璃球, 他突然对爸爸说, 爷爷的马受伤了, 爷爷下不来山了。 (朋)
- 14) 记得是某一个中午, 我刚吃完饭, 正守着炉子烤瓜子, 一个小孩子推门进来了, 他就是鱼纹。 (朋)

もちろん様態や状況をあらわす「コト」が地として解釈されやすいというのは、あくまでも一般的な傾向であり、話し手・書き手の視点のおき方やパースペクティブのとり方によっては囟と解釈される場合もある。

- 15) 胡达老人嗔怪道: “打小就花心, 弄个胭脂饼子做啥? (朋)

ここで“做啥?”は、「何をするのか?」と動作を尋ねているというよりも、「何の役に立たない」と述べられていると解釈できる。したがって、“弄个胭脂饼子”は“做啥?”の様態を表すというよりは、むしろ主語に近く、そのため数量詞が伴っているのであろう。統語論的にみれば、様態や状況を表す表現であっても、語用論的には、より中心的な意味を

含んでいる場合、それはやはり前景化されるべきものである。ただ、様態や状況を表す表現における名詞は数量詞を伴わないことが多いという事実について、その理由を説明しようとするれば、我々の事象に対する一般的な解釈の傾向を無視することはできないであろう。

また、こうした人間の一般的な傾向は、二つのタイプの存現文における数量詞の生起についての説明としても説得力があると考ええる。一般に事物の存在や出現、消失を表す存現文において、完了のマーカ―“了”のついたものは数量詞を伴うのに対し、持続のマーカ―“着”を用いて述べる、いわゆる状態形存現文では、裸の名詞を目的語にとることができる<sup>8</sup>。

- 16) a) 黑板上写了两个字。  
 b)\*黑板上写了字。  
 c) 黑板上写着字。  
 d) 黑板上写着两个字。
- 17) a) 墙上贴了一幅标语。  
 b)\*墙上贴了标语。  
 c) 墙上贴着标语。  
 d) 墙上贴着一幅标语。

16) a) 17) a) は、ある行為によってある場所にあるものが出現したことを表し、16) c)、17) c) はある行為の結果としての状態が存在していることを表している。動作性が残存する 16) a)、17) a) において目的語の名詞は〈現れるモノ〉であり『輪郭のはっきりした個体としての扱いを受ける』<sup>9</sup>し、16) c)、17) c) において目的語の名詞は、16) a) 17) a) の目的語ほど目立たず、とりたててその個性性を明示するまでもない、ということなのであろう。存在をいう場合には、事物は、個体としての扱いを受ける、つまり数量詞をつけることも可能であるが (d)、出現をいう場合、その顕現性ゆえに、個性性を明示しないことは容認されないのだと考えられる (b))。

さらに V 了 O の文終止の問題も、このホモサピエンスとしての一般的な傾向にかかわっている。

- 18) 张三吃了饼子  
 19) 张三开了大门

木村 (1977) は、18) と 19) の文終止の違いについて、両者ともその目的語が数量詞などの修飾語を伴わない簡単なものであるにもかかわらず、後者のみが独立した文として終止するのは、後者に現象文に通じる「事象性」が読み取れることにあるとしている。その場合“张三”は「事象」の「誘発者」とみなされ、前者におけるような「能動性」は認められない。また、目的語は「受動者」として注目を集めることはなく、全体が状態の変化として

提示される。それが後者の文の終止を可能にしているという。

ある「コト」について、その動作性ではなく「事象性」を読み取る、つまり状態として解釈するということは、あくまでも全体としての“あり様”をとらえているのである。そうしたとらえ方の中で、配置されている事物は、ことさら、個性性、いかえれば現実世界における実存性をとり立てられるよりは、やはり概念として類レベルで提示されるべきなのである。なお、かりに19)に動作性を認めたとすれば、やはりこのままでは終止せず、数量詞などの付加が必要になってくるという。このことから、私たちの事象に対する解釈が一通りではなく、「動作性」を認めるか「事象性」を認めるかという、その解釈如何によって数量詞の生起が左右されるということが示されているといえよう。

### 3. 複数あるものの個性性

さて、個体化機能というのは、前述したように、『ある種の抽象の中にある』ものを『具体的世界の「もの」にかえる』働きであるから、これ自身は、複数個の「もの」と矛盾するわけではない。2以上の数を言う場合は、数量に注目しがちであるが、しかしその前提として個体であることが認識されていることは言うまでもない。“三個人”“五枝铅笔”“八张票”など、個体量詞を用いて指す場合はいうまでもなく、“两块蛋糕”“三瓣花瓣”のような部分量詞を用いて指す、さらには“两杯咖啡”“三碗饭”などの借用量詞を用いて指すのは、それらが量詞に示されるような形状でもって bound である、“有界”であると認められているのである。

あるものをどのような個体として切り取るかが、本来的に決定されているものでないことは、借用量詞の使用を考えれば明らかである。いわゆる可算的な名詞であっても、見方によっては様々な切り取り方がある。例えば“一对夫妇”“一双筷子”“一副对联”などは、一組になっているものを一つの個体とみなしたものであるし、“一打铅笔”“一束花”“一捆柴”、さらに“一群人”“一批货”などは何らかの集合を一つの個体とみなしたものである。英語などに可算名詞というカテゴリーがあることは、言ってみれば個体としての切り取り方を、言語として慣用的に決定しておくということである。池上(2000)がいうように、〈小石〉(pebbles)、〈豆〉(beans)が可算名詞で、〈米〉(rice)、〈砂〉(sand)が不可算名詞であることは、個体サイズを考えれば、人間の知覚の一面を反映したものであることは確かである。しかし、一方で個体サイズではなく、属性や用途にその事物の本然を見出すというのもまた人間の知覚の別の一面の反映である。中国語は後者の方式を言語として採用しているものであり、その場その場の解釈に応じ、英語などに比べて“恣意的”に個体の形が決定されるのだ。

では、固体の形を何らかの理由で決定できない場合はどうであろうか。例えば、ある事物が、連続している、広がっているものとして話し手・書き手にとらえられ(この場合、その連続・広がりを実際にどの程度であるかということとは問題ではない)、何らかの個体として輪郭をつけることができない、あるいは輪郭をつけることがそれを含む事象全体の解



釈にそぐわないと認めた場合には、その事物が現実世界にあるものであっても、数量詞は生起しない。

20) 船里已经坐满了搭客。

21) 这是一所有着一百多年历史的学校，校园里布满了鲜花、…

20) は、大河内 (1985) が、話し手が複数個あると意識しているので数量詞が付かないとしてあげた例文のうちの一つである。複数個あるからといっても、常に数量詞がつかないわけではなく、先にあげたように幾つかの個体化の手段がある以上、更なる説明が求められよう。それがすなわち、事物の<連続性>である。そして<連続性>は、その連続性のために、<動作性>が希薄となり、状態としての読みへと繋がるのではないだろうか。中川 (1992) は、これを取り上げ、この名詞が裸であるのは、描写的であるからだとしているが、そもそも描写的な読みを可能としているのは、事物の<連続性>のためと考えられる。

このように数量詞の付加は、複数であっても話し手・書き手が事物をいかなる個体としてとらえるか、あるいは個体とはとらえられないかという主体的な認知に応じて決定されていることが、ここでも示されている。

#### 4. 抽象名詞と個体性

ある事物が話し手・書き手の認知如何によって、その個体としての切り取られ方が変わってくるということにかかわって、最後に抽象名詞の個体性についても考えてみたい。

抽象名詞は、その名のとおり抽象的な概念を表す名詞であるから、個体性というものとはなじまない、というのはその通りである。しかし、実際に小説などを読み進めていくと、数量詞に飾られた抽象名詞を拾い出すことはそう難しくはない。

22) 志氣勇氣一身朝氣 且高歌 (「我是誰」作詞：鄧景生)

(志を持ち勇気みなぎり力あふれ 高らかに歌う！)

23) 一個人拎着一箱遺憾 在夜的城市中心迷惘 (「失樂園」作詞：陳品)

(独り 後悔という名の箱を手に 夜の街をさまよう)

24) 难得如今好天气，才钓得一方和平，才钓得一泓宁静。(何 (2000) の例文より)

確かに詩や散文などには、22) ~ 24) のような、即興的な組み合わせで、量詞といえども、原義の意味を色濃く残している修飾性の高いものが見られる。こうしたものは、やはり作者の特別なイメージを言葉にしたものであり、創造的なものといえよう。このタイプの「数量詞+名詞」は、抽象名詞という点を差し引いても、これまで出てきたものとは明らかに趣を異にする。しかし、25) ~ 27) のような量詞および名詞の組み合わせは、ごく普通の小説を読んでいるとしばしば目にするものである。

- 25) 李仲生在打电脑, 浮肿的脸上浮起一丝宽慰的表情。(留)
- 26) 那是一首女中音演唱的音域浑厚有些苍凉的歌曲, 在嘈杂的列车上能戴着耳机倾听这样一首歌曲, 的确使人的心底漫起了一股浓浓的乡愁。(观)
- 27) 他身子朝后仰着, 偏着头, 眯起一只眼, 夹烟的手举到脸上, 做出一付斜视的样子。(观)

これらは、先の例とは違い辞書などにも記載されている組み合わせであり、慣用されているといつてよいだろう。とはいうものの、「表情」「乡愁」「样子」などは、実際のところ、きわめて漠然とした感覚的なものである。にもかかわらず、それが個体化を意味する数量詞と結びつき、しかも慣用されているということは何を意味するのだろうか。結論からいえば、直接的には把握できない抽象的な事柄を、より具体的な事柄を通して理解しようとする営みを、私たちが常に行っているということである。例えば、「樂しは上、悲しきは下」にとらえるように<sup>10</sup>、量詞として付加された語が持つイメージによって、より具体的、形象的にとらえようとするのである<sup>11</sup>。かさねて、25)～27)は「浮起(浮かぶ)」「漫起(了)(広がる)」「做出(作る、する)」と、「表情」「乡愁」「样子」の出現を述べるのであり、前節で述べたように個体として解釈できるような形で名詞を提示することが、認知論的にも求められている。さらに、次の28)29)においては、「种」「个」が「丝」「股」「付」ほどの形象性がないことから考えて、量詞のもつイメージの助けを借りての具体化もさることながら、統語論・意味論からの要請による具体化<sup>12</sup>、個体化であるという側面が大きいのではないかと思われる。また30)b)c)の訳文における数量詞の有無の違いは、構造の相違、動詞の相違によるものではないだろうか。

- 28) 3月6日凌晨的加格达奇给人一种流放到西伯利亚的苍凉感。(观)
- 29) 他没有想到有了个轰轰烈烈的开头, 却落了悲惨的结局, 这是命。(观)
- 30) a) 数学はサッパリのボクが、理工学部的位置まで考慮に入れる必要はないのだが、ここまで近いと親近感も湧くものだ。(五)
- b) 數學一竅不通的我、當然用不著連理工學院的位置也考慮在內、不過距離這麼近、令我生起一股親切感。
- c) 尽管数学学得一場胡涂的我从没有把理工系放在心上, 但现在却因此对早稻田大学充满了亲近感。

繰り返しになるが、普通名詞であろうが抽象名詞であろうが、それに個体性を読むか、或いは類レベルでとらえるかというのは、あくまでも話し手・聞き手の判断、主観に任せられている。ただ、抽象名詞の場合、その抽象性ゆえに普通名詞と比べ、抽象名詞を含んだ「コト」全体を状況の変化と読み取り類レベルとして提示することは容認されやすいようだ。

- 31) a) 何度も調整を繰り返し、ようやく完成という時、困ったことが生じた。(五)
- b) 经过几次修理, 接近完成时, 又发生了问题。
- c) 反復調整了很多次, 好不容易完成時, 却出現了一個麻煩的問題。

## 5. おわりに

以上、中国語の数量詞の生起を、話し手・聞き手の主体的な事象のとらえ方との関わりで見えてきた。今回は、指称性のあるものに限って話を進めてきたが、“他是一个学生”における“学生”のような指称性の無い場合に付く数量詞もまた、本稿で述べたのとは違った認知活動の如何によって意味づけられる一面があるようである。このことについては、今後の課題とし、稿を改めて考察してみたい。

### 《 註 》

- 1 ある条件下では、「数量詞＋名詞」という形で、示されることもある。  
・铃声震耳——远处一部自行车风驰电掣而来。铃声急迫地、顽强地、继续地越响越近。  
马天民在人行道上停下来，皱眉，远望。  
一部自行车，以惊人的速度，在各式车辆的洪流中穿插而过，不断超挡，接近路口时，更不顾一切，内挡超越，两部三轮车只好刹车。（今）  
ここでは、直前に“马天民”が自転車を止めていることを述べているため、裸の名詞ではどれに照応するのか曖昧になると書き手が判断してのことではないかと推察できる。また中川(1992)では、『数詞が母集団全員の数であるときのみ照应的に用いられる』ことを指摘している。
- 2 数量詞が付いていても、ドキュメントを撮っている“摄像机”と読まれる可能性もある。それは書き手がどちらにも視点を寄せない中立的な態度で描こうとしたのではと、読み手が解釈した場合である。
- 3 話し手が、聞き手がある事物を特定できるかどうかについての判断を誤ると次のような会話がなされることになる。  
“杯子在哪儿？”  
“哪个杯子？”
- 4 個体化機能を担うものとしては、数詞＋量詞、量詞のみの二つの形態がある。本稿では、個体化のマーキングであるという共通点に注目し両者の違いについては考えないものとする。
- 5 田中(1981)は、名詞の指示について、大きく特定指示と不特定指示に分類し、特定指示にはさらに総称指示と唯一指示があるとしている。
- 6 山梨 1995, 山梨 2000 参照。
- 7 大河内(1985) 参照。
- 8 16) 17) の例文を含めて、朱德熙(1982) 参照。
- 9 古川(1996) 参照。古川(1996)は、本稿と同じく認知論的観点から数量詞の現象をとらえ、『中国語は外界認知で<目立つモノ>を言語化するとき、その名詞に数量詞という標識 mark を付け加えて<目立つカタチ>で表現する』という仮説を立て、現象文や移動表現、与奪表現などにおける数量詞の出現から、その妥当性を検証している。
- 10 Lakoff & Johnson(1980) 参照。
- 11 何(2000)、p 121 参照。
- 12 陆(1988)、中川(1992)、古川(1996)などに、二重目的語文の直接目的語は数量詞が欠かせないとの指摘がある。

## 《参考文献》

- 池上 嘉彦 2000 『「日本語論」への招待』 講談社
- 井上 京子 1999 「助数詞は何のためにあるか」『言語』Vol.28 No.10 30-37 頁
- 大河内 康憲 1985 「量詞の個体化機能」『中国語学』232号 日本中国語学会 1-13 頁
- 木村 英樹 1976 「『吃了大餅』と『开了大門』」『アジア・アフリカ語の計数研究』No.6  
43-50 頁
- 1997 「動詞接尾辞“了”の意味と機能」『大河内康憲教授退官記念中国語論文集』東方書店 157-179 頁
- 輿水 優 1964 「『个』について」『中国語学』144号 日本中国語学会 9-22 頁
- 杉村 博文 1999 「“把个老汉感动得……”について」『現代中国語研究論集』中国書店  
347-362 頁
- 坪井栄治郎 1996 「単複の言語学」『言語』Vol.25 No.2 68-71 頁
- 中川正之・李浚哲 1992 「日中両国語における数量表現」『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版 95-116 頁
- 橋本萬太郎 1978 『言語類型地理論』 弘文堂
- 古川 裕 1997 「数量詞限定名詞句の認知文法—指示物の〈顯著性〉と名詞句の〈有標性〉—」『大河内康憲教授退官記念中国語論文集』東方書店 237-266 頁
- 何 杰 2000 『現代汉语量詞研究』 民族出版社
- 山梨 正明 1995 『認知文法論』 ひつじ書房
- 陸 儉明 1988 「現代汉语中数量詞的作用」『語法研究和探索 4』 北京大学出版社 172-186 頁
- 呂 叔湘 1944 「個字的应用范围. 附论单位词前一字的脱落」(『汉语语法论文集(增订本)』 商务印书馆 1984 收 145-175 頁 に拠った)
- 沈 家宣 1995 「“有界”与“无界”」『中国语文』第 5 期 367-379 頁
- Sun, Chao-fen 1988 ‘The discourse function of numeral classifiers in Mandarin Chinese’ “Journal of Chinese Linguistics 《中国语言学报》” Vol.16 No.2 (『功能主义与汉语语法』 北京语言学院出版社 1994 收 「汉语数量詞在话语中的功能」 139-158 頁 に拠った)
- 譚 傲霜 1955 「从“一个”的隐现谈汉语语法体系」『第四届国际汉语教学讨论会论文选量』 北京语言学院出版社 293-298 頁
- 朱 德熙 1982 『语法讲义』 商务印书馆
- Lakoff, G & Johnson, M 1980 ‘Metaphors we live by.’ University of Chicago press (渡辺昇一他訳 1986 『レトリックと人生』 大修館書店 に拠った)

## 《引用文献》

- (留) 刘放・刘莉生・王宛平 『追梦女人——张丽玲和「我们的留学生生活」』 光明日报出版社 2000

- (今) 李天济『李天济电影剧作选』学林出版社 1996
- (朋) 迟子建「朋友们来看雪吧」『朋友们来看雪吧』解放军文艺出版社 2000
- (观) 迟子建「观彗记」『朋友们来看雪吧』解放军文艺出版社 2000
- (五) 乙武洋匡『五体不满足』講談社 1998
- 鄧颺 訳『五体不满足』山东文艺出版社 1999
- 劉 子倩 訳『五體不滿足』圓神出版社：台北 1999
- 「我是誰」「失樂園」『THAT'S ASIAN POP!』ROCK RECORDS(JAPAN)CO.LTD 1998